

2025 Eye's
新潟ここだけ物語

想い | つくる | 伝える

新潟市

[Fuud]

2025
秋号
—— 季刊 ——

三ヶ月の戦場

Take Free

ご自由にお持ちください

信濃川の河口近く、日本海と新潟港が見える小さな丘にたつ「平和記念碑」。新潟市でもっとも激しい爆撃があった8月10日に、過去と未来を象徴する2本の石柱の中央に太陽が沈むように設計されている。日没の瞬間を待つ間、鏡のように磨かれた御影石に夕陽が映り込み幻想的な光景が現れた。

(2025年8月 新潟市中央区 水戸教公園)

がんばろう ● ニッポン!



①

今回の物語の舞台、新潟西港。高校、大学生の頃には魚釣りでよく訪れた。カメラマンになってからは仕事とプライベートの両方で、港の風景を撮影する機会が多くなった。新潟市の中心にあるにもかかわらず、ここにはいつも穏やかな空気が漂っていて、大好きな場所だ。立ち入り禁止区域も多いので、撮影場所は限られるが、港周辺で日常の風景を拾ってみた。

現在、大型船のほとんどが東港の方へ行くので、西港で見る大きな船は佐渡汽船と新日本海フェリーくらい。午後3時頃には両方の船がほぼ同時に入港するのを見ることができる。風の強い日にはタグボートも出動したりして、港内が活気づく。着岸時の旋回も迫力があって、見ていて気持ちが盛り上がる時間帯だ。

新日本海フェリーが午前0時頃出港するので、以後朝まで、港湾内での漁業が認められている。秋から冬の間は「アカヒゲ(正式名アキアミ)」というエビの漁



③

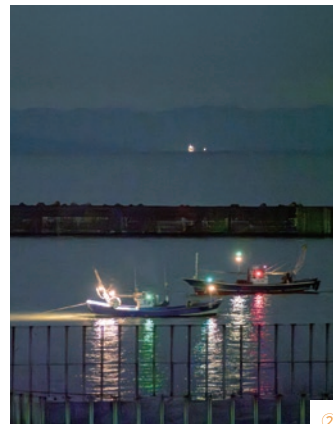
が行われる。暗闇の中、漁船が網を曳き、港湾内を行ったり来たり。知る人も少ない、河川港ならではの風景だ。

日中、立ち入り可能な護岸付近を歩いてみた。工事や運搬など、様々な用途の船が係留されていて興味尽きない。たくさん置いてあるコンテナは、カラフルな文字が書かれていて、ちょっとポップな被写体だ。ここでは以前、カゴを使ったカワガニ漁をする漁師さんを撮らせてもらったこともあった。佐渡汽船ターミナルの近くで一人、軽装で魚釣りをする女性がいた。「天気がいいと、いつもぶらっと来ています。釣れていなかったが、のんびりした空気を楽しんでいるようだった。

80年前、戦争があったことなど全く感じさせない現在の新潟西港。ここで拾った平和な日常のシーンの、ひとつひとつが新潟の宝物なのだと、想いを新たにした。

写真、文章／スタジオF(t) 渡部 佳則

- ① 右から、佐渡汽船、新日本海フェリー。遠くで待機しているのは港内の渡漕船。
② 秋から冬の夜間、港内を往復するアカヒゲ漁の漁船。
③ 静かな港でのんびり魚釣りをする人。



②

編集後記

昨冬、新潟市の東区市民劇団 座・未来が戦時中の新潟港で起きた史実をもとに創作した群像劇「ボンコンツ港の水滸伝」を公演し、600人近くの観劇者に町の周縁にある港が機雷で封鎖された事実を伝えた。脚本は市内在住の40代の鈴木那子さんによるもので、戦争という重いテーマを見事に現代語訳し、巧手の演出陣がドラマ性を高めた。その感動の渦中で歴史を伝える技術の重要性和新潟市が遭った戦災の特異性に気づいた。この発見が今号の発端だった。幸いに戦時中の解像度をあげる手立ては、数々の慰霊碑や記念碑のほか、記念誌・日記・証言記録などの紙媒体が膨大にあった。可能な限り目を通したそれらの行間から、(どうしても戦争中の事実を後世に伝えたい)という、時代の当事者たちの切実な思いが見え、何度も涙で資料を読む手が止まり、同時に先人の思いを汲めるかどうか不安になった。でも戦争に向き合おうとする学生や小学生の存在に励まされ、敗戦80年をふりかえる旅はひとまず終わった。(渡川)

発行所

株式会社 **タカヨシ** **ふうど** 編集室

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 私たちは新潟の食・文化・風土の伝承を通じて持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

■本社・工場／〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800
■東京支社／〒113-0034 東京都文京区湯島3丁目24-11 湯島北東ビル2階 TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884
■上越営業所／〒943-0805 新潟県上越市木田2丁目1番1号 上越セントラルビル5階2 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 520-7049
■東北営業部／〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目3-47 上杉オオウラビル501号室 TEL (022) 266-1711 FAX (022) 266-1712
■東海・関西営業部／〒464-0025 愛知県名古屋市中千種区桜が丘295番地 第8号オオタビル7階 TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081
■オフィシャルサイト／https://www.takayoshi.co.jp

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】<中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、NST、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店みなと工務、朱鷺メッセ、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟県立図書館、新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市立中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandal、ホテルイタリア軒、ホテル日航新潟、リバーとびあ新潟市民芸術文化会館 <東区>新潟空港、パティスリーカフェオールレアン <西区>新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館、佐潟荘 <南区>新潟市農業活性化研究センター <北区>新潟せんべい王国、ビュー福島潟、濁川公民館 <江南区>介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館、北方文化博物館<西蒲区>カーブドッチ、ドメヌ・シヨオ <秋葉区>カフェギャラリーやまぼし、川内自動車、新津鉄道資料館、むらき呉服店
【新発田市】加治川地区公民館、紫雲寺地区公民館、新発田生涯学習センター、新発田市民文化会館、新発田市立図書館、豊満地区公民館、ホテル華風、【聖籠町】聖籠観音の湯 ぎふらん
【村上市】イヨボヤ会館、村上観光協会 【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、やまこ復興交流館おらたる 【燕市】分水ビジターサービスセンター 【加茂市】椿の家
【出雲崎町】越後出雲崎天領の里 【十日町市】十日町市観光協会、十日町市博物館 【南魚沼市】樺苑
【上越市】上越観光コンベンション協会、上越市立水族博物館うみがたり、上越市立高田図書館、上越市役所、上越あるん村
【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡、佐渡市立図書館
【東京都】<中央区>ブリッジにいがた <千代田区>新潟市東京事務所
本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレス
バイندر

針金・糊・加熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。

RICE
INK

この印刷物は環境にやさしい米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。

太平洋戦争末期の昭和二十年五月。それまで平穏だった新潟市に、突如、リアルな戦争がやってきた。多くの軍隊が続々と進駐し、町のあちらこちらに高射砲やサーチライトが設置され、新緑の柳に彩られた新潟は、軍事色の強い町に早変わりした。それから三ヶ月の間、信濃川河口にある新潟港を中心に、度重なる米軍の機雷攻撃があり、市民のメンタルを日に日に追い込んだ。八十年前の新潟から現在、そして未来へ時の旅をした。

『満州国』とは？

想い 期待された日本海航路

なぜ新潟に軍隊

太平洋戦争と新潟を語るうえで、『満州国』の存在は欠かせない。満州国とはご存知のように清王朝のラストエンペラー愛新覚羅溥儀を国主に迎え、日本が中国東北部に建国した国である。その歴史は短く昭和七年（一九三二）に誕生し、終戦とともに消滅した。国土が小さく資源が乏しい日本は、広大な土地と地下資源に恵まれていた満州に開拓団を送りこみ、そこで産出した米や大豆、石炭や鉄鋼を本土に輸送し国民生活と経済発展を支えた。その満

州国の首都・新京（現：長春）と東京をむすぶ最短距離に新潟市が位置し、新潟港は満州からの物資の陸揚げ港として重要な役割を担っていた。そして戦争末期、太平洋側の主要な港が米軍に機雷封鎖され、海外からの物資が途絶えると、新潟港がますます重要になった。とくに危機的な食糧難に陥っていた日本にとって、満州から輸送されてくる食糧が頼りだった。それにより新潟港の輸送能力をあげる必要があり、港湾荷役の増強をはかるために大勢の軍隊が送りこまれ、さらに港を守るための戦闘部隊も投入された。

港湾荷役を行ったのは、通称「暁部隊」と呼ばれた陸軍の船舶輸送隊。その中枢を担う司令部に、広島

から赴任してきた吉田郁生さんがいた。生前に取材を受けた時の記事があり、当時の荷役の様子を、こう説明している。「県営埠頭には鉄道の線路が引き込まれていまして、満州から運ばれてきた大豆などをクレーンで陸揚げし、それをすぐに貨車に積み込み、積荷が満タンになれば貨車が出ていく。するとまた次の貨車が入る、という具合で、一日五〇〇両の貨車が関東や関西方面に向かっていました」。埠頭は、いつも満州からの大型輸送船が十数隻接岸し、夜を徹した作業が三ヶ月以上続いた。さらに本土決戦を想定し、満州に工場疎開するために工場資材の輸送もあったが、それほど多くしないうちに終戦を迎えた、とある。

ついに始まる機雷攻撃

こうして埠頭が荷役で沸きたった頃の五月十四日の真夜中。空襲警報で眠りを破られた市民の耳に、米軍の最新大型爆撃機の不気味なエンジン音が、遠くから響いてきた。萬代橋の橋詰めに据えられたサーチライトの閃光が敵の在処をとらえようと無月の夜空を忙しく動きまわり、高射砲からは先端に光を発する砲弾が放たれた。が、追撃も虚しく、四機の爆撃機が信濃川と阿賀野川の河口付近の上空から機雷を投下。パラシュートで落下速度を制御された

軍の『飢餓作戦』が日本海側にも及んできたのである。この作戦は機雷で港を封鎖し物資の補給路を遮断する、文字通りの兵糧攻めだった。機雷の初投下から、決まって深夜の時間帯に、おおよそ週に一回のスパンで新潟港の港内や港外に機雷が投下された。この機雷攻撃は三ヶ月も続き、その総数は七八一個といわれている。

こうして機雷が潜む危険な港になっても、満州からの輸送船、佐渡汽船、漁船など、機雷を除去する掃海作業のために一時的に航行を禁止する期間をのぞき航行が続いた。また港の水深を維持するため川底の土砂を取り除く浚渫船も作業の手を止めなかった。それにより触雷事故が頻発し、民間人と浚渫作業員、掃海作業の船員たち九一人が犠牲になった。その数は戦争中に新潟市域で亡くなった人の七割近くを占めた。なかでも七月二日に起きた『鉄工丸事件』は、二十八人が死亡する触雷事故としては最悪なものになった。

そもそも機雷とは

そもそも機雷とは、どんな仕組みで爆発するのか。海中に浮遊し、鋼鉄製の船本体に帯びている磁気や、スクリュウが回転する音に反応し、船体が近づくと爆

機雷は、ふわふわと揺れながら、漆黒の海にゆっくり消えていった。その数、四三個。この日、新潟港周辺の海に初めて機雷が投下された。

その夜の交戦を自宅の窓から見ていた少年がいた。山の下小学校の六年生だった細野仁さんである。「東の空から飛行機が飛んできて、近くの本原に据えられている高射砲から敵の飛行機に向け砲弾が発射されたのですが、相当高いところに飛んでいるので、弾が届かず途中で暗い空に弧を描いて落下していきまして」と遠い日の夜を振り返った。怖くなかったかと問うと「好奇心の方が先で、怖いと思わなかった。ただ一度だけ怖い思いをしたことがあります。祖母をリヤカーに乗せ沼垂の鍼灸院に行く途中、突然、目の前に五センチほどの鉄の塊が落下したんです。触ってみると、まだ熱く、裂け口が非常に鋭かったです。もし当たっていたらと思うとゾッとしますね」。

この夜を境に、軍が危惧した米

発する仕掛けになっている。機雷に接近した瞬間に爆発するものと、接近しても爆破装置が起動せず安全と思わせておいて数回目で爆発する時限型があり、新潟港にはこの二つのタイプが投下された。投下地点は、船の通り道として定められている航路に集中していた。とはいえ海上から機雷を見ることができず、航行中の船がそれを避けることは、当時の技術では難しかった。

では実際に触雷する瞬間、航行中の船の操舵室は、どんな状態になるのか。新潟港の港口で触雷した『宇品丸』について調べた森下智の「軍隊輸送船宇品丸 初の陸軍保有船小史」の中で、航海士の荒稲造氏が詳しく語っているので、ここに要約して引用する。「目的地の新潟港に近づくと、いつまで経ってもコンパスがフラフラしてセツトしなくなった。これは磁気機雷が近いという明白な兆候。船長に報告すると、すぐに何があるでも港の中に入らなければと、エンジンが壊れそうになるまでフルスピードで港に向かった。全速とはいえ時速二〇キロが精一杯。結局、機雷に接触し船倉が破壊され、そこから海水が侵入し、船体が傾き始めたので、沈没を避けるために港の入口付近の浅瀬に敢えて座礁させた」。現場の緊迫感が伝わってくる。

この宇品丸こそ、新潟では知る人ぞ知る伝説の軍用船だ。



日本海航路の玄関口のひとつ新潟港を通るルートが、満州国の首都・新京（現：長春）と東京間をむすぶ最短距離にあることを示す「日満連絡の要津新潟港」（新潟市文書館 提供）



戦争末期、米軍により多くの機雷が投下された新潟港。現在は新潟西港と呼ぶ。（2025.9）

哀れで、あわれで

つくる 宇品丸ヒストリー

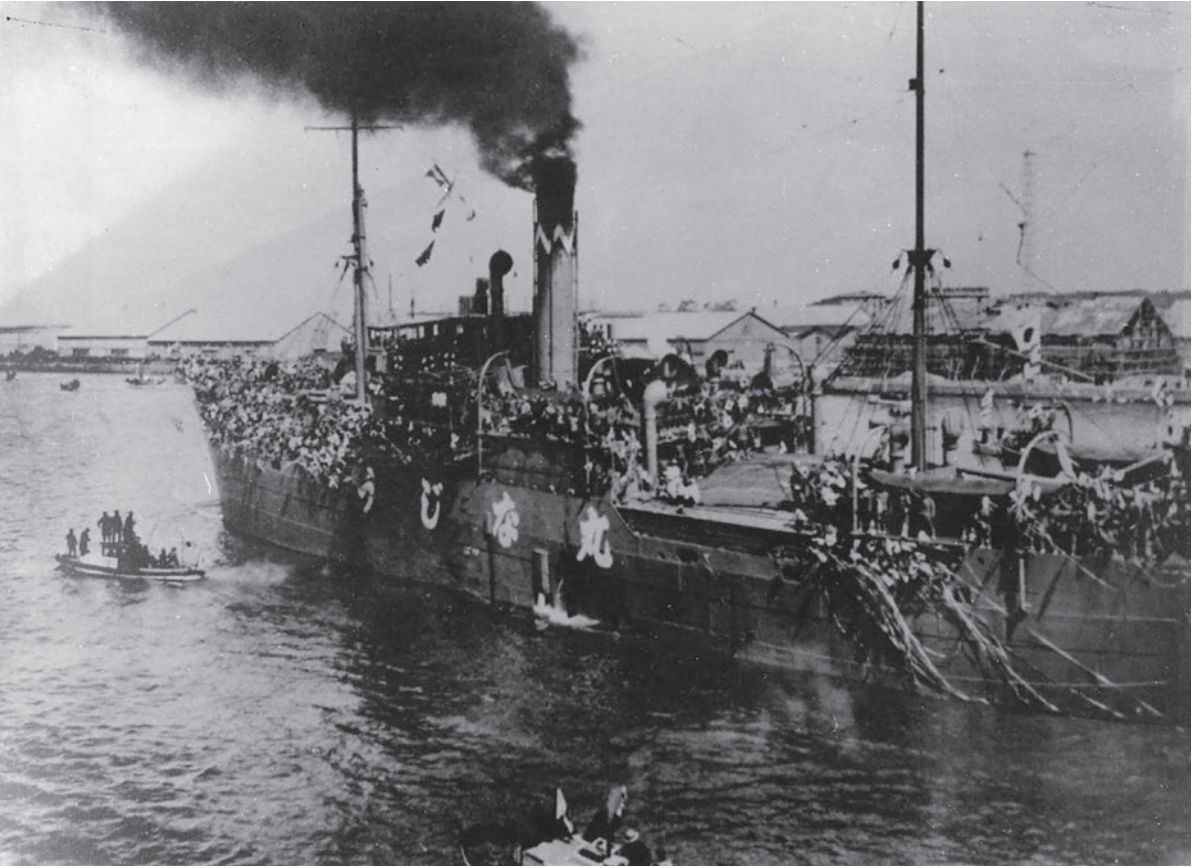
ばんざあーい！

宇品丸は、陸軍が創軍以来、はじめて購入した軍用船である。それまで民間の徴用舶や海軍艦船を利用し海上輸送をしていたが、対戦気運が高まった昭和初期、フレキシブルに運用できる独自の輸送船を持つ必要に迫られ宇品丸を購入した。その前身は、米国ミネソタ州ダルースの造船所で建造された貨客船。商船として十年ほど航行した後、日本の民間会社に譲渡され、それを陸軍が取得し、軍隊輸送船として改造し『宇品丸』と命名。その船名は陸軍運輸部の本拠地である広島市宇品に由来し、宇品丸は名実ともに陸軍の顔として全国三十万人の兵が仰ぎ見る軍用船のエースだった。

以来、昭和の戦争史をトレースするように、戦局を転換する重要な作戦に護送船団の一員として参加したり、教育訓練、部隊と補給品の輸送など国内外で活躍した。そのひとつに、満州事変が起きた翌年の昭和七年（一九三二）三月、満州に駐屯する兵の交替要員として、新潟県の新発田と高田を含む東北方面の歩兵部隊二千五百人を、相田丸とともに新潟港から中国の大連港まで輸送した任務があった。

満州国が誕生し、戦況が好調だった時代のこと。埠頭近くに集まった大勢の人が演じた劇的な歓送シーン我当时の新聞がこんなふうに報じている。

『岸壁の一面で多くの退役軍人がドラム缶や菓子缶を叩き軍国調の拍子をとっている。その勇ましい音につられ、どこからともなく軍歌が始まり、次第に群衆と甲板の兵士たち



昭和7（1932）年3月24日、県内と東北の歩兵隊の兵士を乗せ県営埠頭から新潟港の港口に向かう宇品丸。（撮影者不明 新潟市歴史博物館提供）



との間で軍歌の応酬となった。すると感極まった二人の兵士が甲板の最上部に駆けあがり、大旗を大きく左右に振り、あたかもオーケストラの指揮者のようになった。それに呼応した大群衆が声を合わせ『ここはお国の何百里〜♪』と歌い、その大合唱が地鳴りになり岸壁を震わせた。そして、正午。出港を告げる長い汽笛が二隻の船の間で互いに交わされ、兵士を満載した宇品丸を先頭に、日の丸の旗と万歳の声に埋まる中央埠頭の岸壁を、ゆっくり、ゆっくり、静かに離れて行った。

左上の写真が撮影される、ほんの少し前の出来事である。

伝説になった日

それから十三年。長岡の町が焼夷弾で焼かれ、広島に続き長崎に原爆が投下された翌日の昭和二十年（一九四五）八月十日金曜日。新潟市は鈍色の厚い雲の下にあり、気温三十一度のにぼる蒸し暑い昼時を迎えていた。そんな緩やかな時間に、いきなり東の空から急降下してきた米軍の艦載機十六機が、新潟港の周辺に爆弾の雨を降らせた。バリバリバリッ！その時、左岸の船着場に向かう佐渡汽船の『おけさ丸』が機銃掃射を受け二瞬のうちに十四人の船員と乗客の未来を奪った。

くとは思えないしっかりとした口調で話してくれたそうだ。

宇品丸が座礁していた港が目の前に見える、西野さんを含む山田町の住民有志は戦闘で命を落とした兵士と船員十九人が町を守ってくれたとして、終戦から十年ほど経た頃から、機銃攻撃があった八月十日に慰霊祭を始めた。その翌年に木製の慰霊柱をたて、後年、コンクリート製の慰霊碑に作りかえた。その碑は現在も、みなとトンネルの左岸側入口近くの公園で、昭和の気配を漂わせ薄れゆく記憶を繋ぎ止めている。

『気が澄みました』

渡辺さんは、戦後八十年を迎えた今夏、愛知県や三重県から初めて新潟に訪れた宇品丸の遺族たちに、慰霊碑と戦闘のあった現場を案内した。その時の様子を「遺族の方々の年齢は、五十代から七十年代で、八十年の節目だから来られたそうです。写真や家族の話でしか知らなかったお爺ちゃんや曾祖父さんが戦死した現場を目の前にして、感慨深そうでした。水面に向かい長い時間、手を合わせた方が、『これで気が澄みました』と心持ち目を潤ませ言ったことが印象的でした。後日、『長い間、慰霊碑を守ってくれて、ありがとうございました』という礼状が届きました。ほんとうは私が守っ

同じ頃、信濃川の河口左岸に座礁していた宇品丸も、艦載機を操縦するパイロットの顔が見えるほどの至近距離から攻撃を受けた。しかし高射砲や機関砲を装備していた宇品丸は、乗船していた百人の砲兵隊員が応戦し、艦載機一機を撃墜。だが全方向から次々に襲ってくる敵機の戦闘力には抗えず、十数分におよぶ攻防戦の末、ロケット弾が着弾し火災が発生。火の周りは速く、船内の爆薬に引火し船は炎上した。ボーッと！ボーッと！ボーッと！と非常汽笛を港に響かせ、命を落とした戦友に後ろ髪を引かれながらも総員退去した。その間際、爆弾の信管を抜き海中に放棄したが全てを処理しきれず、宇品丸は炎上し続け、焼け爛れた赤い船腹を人びとの目に晒した。それがエース宇品丸の最後の姿だった。

この様子を現場近くの新潟鉄工所の職員、西野留蔵さんが見ており、その話を新潟市の戦跡に詳しい渡辺博さんが聞いていた。それは、おおよそ次のようになる。『船中の爆弾が爆発するたびに、港に水柱が立ち、海面がうねり、岸壁まで飛沫が飛んできた。そして呻き声をあげるように一昼夜燃え続け、船体を港口に傾けた姿は、哀れで哀れで。敵の攻撃を一身に受けてくれたと思うと、なおのこと切なかった』。百歳近

たのではなく、西野さんたち山田町の人たちが細々と慰霊を続けてきたのです。とても立派な慰霊碑を住民が経費を出し合って建立したのですから、町内の人たちがいかに純粹に恩を感じていたかが想像できますね」と教えてくれた。

港に近いへしも町で生まれ育った渡辺さんが、宇品丸に興味をもったのは定年後のこと。身近な場所に凄惨な物語があったことを知り、戦時中の新潟で起きた出来事を調べ始めたそう。そして町なかにある歴史遺産や文化財をガイドする新潟市シテイガイド制度が発足したので、戦争の足跡を訪ねる町歩きのコースも作り現在に至っている。依頼があればガイドをするそうだが、歴史を繋げるという意味で、若いメンバーに戦争の話を伝え現地案内をシフトしていきたいという。このコースは、港があった新潟だからこそ、特徴的な戦争被害が凝縮されている。



新潟港の前に、おけさ丸が爆撃を受けた場所を示す渡辺博さん。



大正期の新潟港中央埠頭(新潟県立図書館 所蔵)

読者の声 ～前号を読んで～

新潟県は露天市が多い！

夏号の「六斎市」もとても良い記事でした。新潟県は露天市が全国で最も多く開かれているのですね！魚介類もほんとうに美味しそうで、また新潟を訪れたいくなりました。編集部の皆様に心からの敬意を表します。
(東京都60代男性)



国土のために戦死した方々を英霊として祀る新潟縣護國神社の「みたま祭り」。(新潟市)

柏崎市出身の押見天さんは、『満州柏崎村』とロシアの侵攻により引き揚げる際に中国人に預けられた一人の中国残留孤児をテーマに取りあげた。柏崎市の赤坂山公園に建つ高さ七メートルもある満州柏崎村の慰霊碑を見たことが始まりだった。「知らないことばかりでした。満州開拓団にしても、その背景を探ると明治時代までさかのぼり、ほんとうに複雑です。ただ柏崎に永住帰国した本間有三さんを取材した時、その方の弟さんがなんと私の幼少だった時のお医者さんだったんです。ほんとに、びっくりしました。その後、このご縁を大切にし、本間家ストーリーのような映像作品を作ればと思っています」。なお息子を満州に残してき

中国残留孤児とその家族

内屈指の歩兵連隊と称賛されただけの風格が晩夏の天をついていた。

触雷による鉄工丸事件

本間さんの母親は、中国との国交回復後、いろんな伝手を頼り、探しに探して、中国人の養母と暮らしていた本間さんを見つけることができたという。柏崎に中国残留孤児がおられたことを、この時初めて知った。

永井真由さんは、新潟市西区にある新潟工業高校の敷地に立つ『平和への祈り』の碑を見て、戦時中、新潟港で勤労働員された大勢の生徒が亡くなった事実を知り、「鉄工丸事件」と港の機雷封鎖に迫った。「この事件は、(へしも町)にある新潟鉄工所入船工場から対岸の山ノ下工場に向かった渡し船が機雷に触れて爆発し、乗っていた新潟工業学校の生徒七人、新潟商業学校の生徒三人、相川中学校の生徒二人のほか鉄工所関係者十六人、計二十八人が亡くなった事件です。新潟市は焼夷弾が

投下され町全体が破壊されるような大きな被害はありませんでした。でも機雷攻撃が激しく、戦後も触雷事故があり、いままも四百個近くが海底に沈んでいると言われています。新潟市の人でも、このように教科書では教えてくれない戦争が身近にあったことを知る人は、少ないようです。もっと大勢の人に知ってもらいたいと思います。でも、他の二人と同じで、資料には聞いたことがない言葉ばかりでイメージをつかめないことに苦労しています」。

後日、永井さんと一緒に鉄工丸の事故があった港を見に行った。河口をめざし滔々と流れる信濃川の水面を永井さんは、いつまでも眺めていた。

戦争の話は伝えにくい。でも若者たちの素直な心の反応に接し、自分目線で戦争の話をもっとしていいと思った。それぞれの土地にあった戦争体験を、その土地の個性を語るストーリーとしてクールに伝える時代がすでに来ている。



新発田市の西公園の一角にそびえるビルマ慰霊平和塔。



多くの生徒が死亡した「鉄工丸事件」の記憶を忘れないよう建立された新潟工業高校の「平和への祈り」の碑。(新潟市)

では学生一人ひとりのテーマと苦労している点を聞いてみよう。
高橋由翔さんは新発田市の陸上自衛隊新発田駐屯地の向かいにある「西公園」の、他の地域には見られない形の塔や碑と、その数の多さに注目した。それらと公園を何か結びつけることができないかと思案中だという。「公園には、日清・日露戦争から始まり、昭和初期のシベリア出兵、太平洋戦争末期のガダルカナル島、ビルマ戦など激戦地で戦死した兵士の霊が祀られています。現在の自衛隊駐屯地は、もともと旧陸軍新発田歩兵第十六連隊の駐屯地でしたから、それらの塔や碑から連隊の戦歴を辿ることができます。でも、それぞれの戦争がどんなもので、どんな背景があったのかを調べるのは大変ですし、どうやってまとめればいいかも悩みます」。後日、はじめに西公園に行ってみた。さすがに国



新潟港の「鉄工丸事件」を探る永井真由さん。



中国残留孤児のその後を追う押見天さん。



新発田市の西公園に注目した高橋由翔さん。



学生たちに映像制作のポイントをアドバイスする一戸信哉さん。

若者に教わる戦争

伝える 無知の知を 実践

八十年のギャップ

終戦の節目の年を迎えるたびに、記憶の風化が課題になる。確かに時とともにリアリティは薄まる。でも、あれだけの戦禍を忘れるだろうか。

いまま町の片隅にひっそりと佇む戦跡を入り口に、それまで何も知らなかった戦争を知ろうとする若者がいる。新発田市にある敬和学園

大学国際文化学科・一戸信哉教授のゼミに参加している三人の学生だ。それぞれが関心をもった『戦争』を主題にした映像作品の制作が進んでいる。いったい若者は、戦争の何

に惹かれ、どのように作品にしようとしているのか。大学が提供しているラジオ番組で「私が取り組む『戦後八十年』」について三人が話すというので収録現場にお邪魔した。朝日が差し込む教室で、若者たちの口から『触雷』『満州開拓』『ガダルカナル島』など日常であり使わない言葉がボンボン飛び出す光景に、まず驚いた。そして世代を超えて理解しあえる共通言語を見いだし嬉しくなった。

「今年に入って地元メディアから、取材の申し入れが増えました。いまの若者たちが戦争をどう見ているかに関心があるのでしょうか。学生たちにとって、戦争を客観的に見るには、歴史的な背景があまりにも複雑なの

で、たまたま戦後八十年の年に居あわせた、いまの自分の気持ちを大切にしたい作品作りをしようと教えています。いままで全く知らなかった戦争について、その時代背景を調べ、取材を通じて見えてきたことを作品にする。それは若者にしか出来ないこととです」と一戸さんが説明する。

激戦の記憶